

国際社会としての中世禅林

村井章介（吉田光男編『アジア理解講座④日韓中の交流』（山川出版社 二〇〇四年）より）

日本における禅宗には大きく二つの宗派があつて、臨済宗は栄西、曹洞宗は道元がそれぞれ日本に伝えた、というのが教科書的な知識だが、じつは、禅宗の日本渡来はその二人だけによるのではない。一二四〇年代ぐらいから一四世紀のなかばにかけてのほぼ一世紀、たくさん禅僧たちが中国から日本に渡来して、それぞれの流派の禅宗を伝えた。私はこの時代を「渡来僧の世紀」と呼んでいる。

「渡来僧」というのは、中国から日本に渡来して日本の禅宗界で活躍した禅僧たちのことで、私が調べたところ、三十名ほどが確認できる。逆に日本から中国に渡った僧のことを「渡海僧」と呼んでおり、二〇〇をこえる数が史料から確認できる。この時代には、それだけひんばんに往来が日中間にあつたのである。

この後、一三六八年に朱元璋が大都（今の北京）を陥落させ、元を北に追いはらつて明王朝を建てると、こういう渡来僧はいなくなる。そしてまた、日本から僧侶が中国に渡って各地を遍歴するような状況もなくなる。これは中国側の政策の変化によるもので、明代はあらゆる外国との通商関係を統制した時代であつた。貿易も勘合貿易という中国が認めるものしか受け入れないかたちになるが、僧侶もまた、周辺の国家が遣わす使者としてのみ中国に行くことができた。これ

と異なつて、元代はそういう国家的な統制が大変ルーズだった。そのために、なにも国家の使命を帯びてはいない民間の僧侶たちが、商業的な貿易船に乗つて中国に渡航できた。（中略）

中国渡航ブーム

私のいう「渡来僧の世紀」に、日本禅僧の中国渡航ブームというべき現象があるわけだが、その様子を具体的に見せてくれるおもしろい資料がある。『中巖円月和尚自歴譜』というもので、中



中巖円月像（京都・霊源院蔵）

巖円月という、日本の五山文学（禅宗社会で生み出された詩や散文などの総称）初期の代表的な作者の一人が、自分の生涯を年代を追って記したもので、文体が年表風なので自伝とはいえないかもしれないが、なかなか内容豊富でおもしろい。禅僧の伝記というと、弟子たちが師匠の伝記をつくるのがふつうなのだが、中巖の場合は自分で自分のものをつくったわけである。

中巖は鎌倉時代の終わりのころ中国に渡つて、七年ほど滞在して、多くの師

匠について修行し、幕府が滅びる直前に日本に帰った。その間のことを述べた部分を読むと、二つの点に興味をひかれる。ひとつは、当時日中間を往来していた貿易船の姿が垣間見えること（中略）、もうひとつは、彼が中国に渡ってさまざまな人と接触するなかに、日本僧の渡海ブームの一端があらわれていることである。

まず正中二年（一三二五）の条を見ると、「江南に到る」とあり、中国の南部、今の杭州を中心とする地域に渡った。そのとき元の年号は泰定二年であった。そして雪竇山資聖寺で冬を過ごし、「旧友全珠侍者」に会っている。日本で知りあつた友だちが中国に滞在しているのに出会つたのである。

翌年、泰定三年条を見ると、「時に龍山和尚単寮にあり」とある。この龍山とは龍山徳見という下総の千葉氏出身の禅僧で、中国に渡つても数年で帰る人が多いなかで、憧れの地・中国に一三〇五年から四九年まで四五年間も滞在したが、最後はやはり日本に帰ってくる、という経歴をもつ人である。この人に中巖は雲巖寺で会い、「郷の尊宿をもつて朝夕参扣す」、つまり故国の大変すぐれた師匠であるので、朝な夕なに門を叩いた、と書かれている。

さらに泰定五年条を見ると、中巖は道場山という寺で、重要な役に就いていた東陵永璵・雪村友梅という二人に会っている。東陵は中国人で、この記事のだいぶあと、一三五一年に日本に渡来する。もう一人の雪村友梅は、二十年以上中国に滞在した渡海僧で、中巖より少し先輩の五山文学作者として有名な人物である。

その翌年、天曆元年（一三二九）にも、もう一度、龍山徳見を訪れた記事がある。そのときに、

不聞契聞という中巖の親友が、中国における政治的な事件に関係したという嫌疑をかけられ、武昌で官憲にとらえられてしまったと聞き、その難を救おうと武昌へ行ったところ、すでに嫌疑は晴れていた、という。

このように、中巖は中国にいた数年のあいだに、何人もの日本からの渡海僧に出会っている。今、私たちが海外旅行にでかけるとよく日本人に出会うが、それと似たような状況が、当時中国大陸にあったということが、この『自暦譜』を読むと手にとるようにわかる。それだけ大勢の日本の禅僧たちが中国に押し寄せていた、そういう時代だったのである。

バイリンガルな世界

この時代には、日本僧が中国に行くだけではなく、中国の、それもあり大物の禅僧が日本に来て、禅寺を開いたり、あるいはすでにある禅寺の住持になったりということが見られた。そんななかで、禅寺はいつたいどんな空間になっていたのだろうか。

もともと典型的な寺院をひとつあげるとすれば、鎌倉にある建長寺である。建長寺の開山は蘭溪道隆だが、蘭溪のあと、おもだった渡来僧はまず建長寺に入って住持になるのが慣例になってくる。（中略）

そういうわけで、初期の建長寺の住持はほとんどが中国人である。その結果、建長寺は、中国の寺院がそのまま引越してきたような、大変異国的な空間になったようである。異国から僧侶がわたってきてまるで異国のような、という感想を『沙石集』という説話集を残したことで有名

な無住という文学僧が、別の著作『雑談集』のなかで漏らしている。ただし、今、私たちが建長寺に行ってみても、残念ながらそういう雰囲気や当時のままに味わうことはできない。この時代のあと、建長寺は何度も火災にあっており、鎌倉時代の建物などひとつも残っていないからである。焼けたあと建てかえるたびに和風になっていったので、今ではそれほど異国的という感じはしなくなっている。

そういう異国風の空間となった禅寺のなかでは、トップが中国人だけに、中国語が飛び交っていた。禅寺では住持が弟子とのあいだでさまざまな問答をするという儀式がおこなわれる。いわゆる禅問答というものである。弟子たちは、そういう問答をへて、しだいに禅宗社会のなかで成長していく、やがて悟りを開くわけである。そういう問答の場で中国語が使われていたことがわかる史料がある。『竺仙和尚語録』という、竺仙梵僊という渡来僧の作品集におさめられた、ある問答の記録がそれである。

竺仙が鎌倉五山のひとつである淨智寺の住持だったとき、椿庭海寿という日本の禅僧が師の前にでて問答をした。「師再び垂語して曰く」とあって――垂語というのはことばを発すること――、「寿持者」すなわち椿庭海寿にたいして、「適間（たつた今）条に違い令を犯せり、不恁麼の底（そうでないなら）、更に聞話することある麼」と問いかける。「麼」という古典漢文には使われない字があるが、こういう同時代の中国語の俗語的な表現のなかに、リアルタイムの日中交流がみとれる。

「条に違い令を犯せり」などとあえてきつい表現をして、おまえは私になにを訪ねようという

のか、と師は弟子に迫る。これに椿庭が、「達磨西来して言語通ぜざるに、已に曾て伝法せり。学人上来す、和尚は如何」と答える。達磨はインドから中国にきて禅宗を伝えた禅の第一祖だが、当然、彼は中国語を知らなかったはずだ。それなのに禅の法は中国に伝わったではないか。「学人」というのは椿庭自身のことだが、私は今ここにやってきた。中国から来た異言語の人であるあなたは、いったいどうやって私に法を伝えるのか、とボールを投げ返したのである。それを竺仙が「汝、還（ま）た法を得るや未（いな）や」、おまえも私から法をえたというのか、と打ち返すわけだが、こういう禅問答よりも、私がおもしろうと思うのはそのつぎである。

「是の時、寿その舌音を却転し、日本郷談を作して云う」、という二行に割った注記があつて、そのあとに「如何是れ祖師西来の意」という椿庭のことばが続く。「法を得るや未（いな）や」というところまでの問答は中国語でおこなわれていたが、突然、椿庭は「舌音を却転し」すなわち日本語に切りかえて、「如何是れ祖師西来の意」という問いを發した。そうしたところ竺仙は、「亦日本音を操りて云う」、すなわち自分も日本語に切りかえて、「庭前の柏樹子」と答えた。

弟子を悟りに導くためのスタンダードになるような問答を公案というが、「庭前の柏樹子」もそのひとつである。庭先にある柏の木というだけの意味だが、要するに、なんの変哲もない小さな木にも仏性は宿っている、という含意である。昔の有名な禅問答のなかでそういうことばが發せられ、それが公案として定着したものである。木にさえ仏性が宿ることができるのだから、ことばが違つてもたいした問題ではない、という心であらう。

このようなバイリンガル状況は、この時代の禅宗寺院にかなり広く存在したと考えてよい。